

自閉的障害者の描画行動 ―事例研究―

浜谷 直人

1 はじめに

知的発達障害をもっている子どもがしばしば素晴らしい描画能力を発揮することに、精神医学、心理学、美術教育などの関係者が関心を寄せている。それらの事例の中でも、Nadia (Selfe, L. (1977)) の特異に傑出した絵をめぐっては、とりわけ心理学的な視点から関心を引いた。Nadiaは知的発達障害をもつだけでなく自閉症という診断を受けた女兒であった。その絵が出版されてまもなく、心理学者の間で議論を引き起こし、その事例の意味することをめぐって活発に検討が加えられた。Nadiaの絵は、描画発達の定説に疑問を投げかけるものであった。

描画の発達を記述する概念や段階には諸説があるが、おおまかには次のように考えられている。1歳代に始まるなぐりがきとよばれる段階に始まり、しだいに明確な形が出現し、その形が分化、統合されて、3歳代頃の人物を頭足人と呼ばれる簡潔な図式で描く段階を経て、5、6歳頃には画面上に複数の図式を接合した豊かな子ども期独特の絵（知的リアリズム期）を描くようになり、7、8歳頃になると、奥行きなどの3次元空間の情報を遠近法などを使用して画面を一視点からの見えに統合して描き始める（視覚的リアリズム期）ようになる。

Nadiaの絵は、そのような定説に照らして以下のような点で異例であった。Nadiaは3歳半という年齢で遠近感のある絵を描いた。それは、通常の子どもが7、8歳になって描き始める遠近法的な絵よりも巧みなものであった。まず、その早熟さがきわめて異例であった。そして、その早熟さは、Nadiaの言語・社会的な発達の遅れや障害に照らして不釣り合いに突出していた。次に、通常、そのような巧みな絵を描くことができるようになる以前に先行しその発達を準備する諸段階、なぐりがき段階の絵や知的リアリズム段階の描画が見られない

ままにそのような絵を描いた。それが事実であれば、描画発達の定説をくつがえす可能性がある事例として受けとめられた (Arnheim, R. 1980)。

Nadia に続いて、自閉的な障害をもつ異例な描画能力を発揮するいくつかの事例が報告された (Selfe, L. (1983), 浜谷ら (1990), 毛塚 (1991))。同時に、この現象をめぐる心理学的な解釈と議論が提起され、理論的争点をめぐる調査研究が行われた (Charman, T. & Baron-Cohen, S. 1994)。一方で、このような現象について、学術的な範囲をこえた知的公衆への紹介も行われ広く関心を集めた (トレッファート (1990), サックス (1992, 1997))。

さて、近年、自閉症の人の自伝が出版され、その内的に豊かで独特なイメージが明らかになりつつある。かれらは、ものごとを言語ではなく視覚的なイメージに変換することによって理解しようとしたこと (グラディン (1994), 森口 (1996)), 形や色彩の世界につよく魅かれたこと (Williams (1992)) などを語っている。同時に、周囲との摩擦や葛藤に苦しみ、世界と協調していく困難による、強い感情的な経験をも告白している。このような自伝を通して、われわれは、自閉症の人たちが意外な物理的刺激に心を奪われたり、社会的な関係で敏感に感じ悩んでいる姿を知ることができる。しかし、これらの報告は、アスペルガー症候群ないしは、高機能の自閉症とよばれる相対的に高い知的能力をもった自閉的障害の人たちによるものである。このため、そのような喜び・苦悩のような豊かな内的世界は知的に高い人たちにだけ見られるのではないかという見方がある。

知的な障害の重い自閉の人にとっては自伝のように言語による表現は困難である。しかし、絵のような視覚的な表現ならば、それが可能になることは考えうる。

そのような事例として、Ishii ら (1996) の報告をあげることができる。それは、9年以上にわたって、自分の幼稚園時代の日々を2000枚以上の絵に描いた、重い知的障害をもった成人自閉症男性の絵の研究である。かれは、16歳になってから、幼稚園 (6歳) 時代の一日の時々刻々の瞬間をコマ写しのように絵にした。入浴場面の60枚の一連の絵では、自分の身体が様々な視点から描かれ、2週間を要して描き上げている。この夥しい絵から、Ishii らは、自閉症

の人が生き生きと過去の楽しい記憶を再体験し楽しむことができること、性と裸体への関心が重要な描く動機であったと考えられること、過去の記憶が内的世界において重要であることを示す、と考察している。

杉山(1997)は、この絵に驚くと同時に畏敬の念を抱くと述べている。そして、自閉的障害者が思春期以降に顕著にみせる想起パニックの原因となる過去の経験のイメージが現在に侵入してくるタイムスリップ現象のような病理的な現象との関連から絵を解釈する可能性を指摘している。

この事例は、自閉的障害児者が描く写真的にリアルな絵だけでなく、生活経験にもとづく感情豊かな絵にもまた注目する意義があること、幼児期だけでなく成人にいたるまでの絵もまた注目すべきことを示唆している。しかもそのような絵は知的に高い人のものに限らない。また、絵の形の分析だけでなく、内容と、それに対応する生活や心の世界との関連から分析して、絵の意味をさぐることができることをも示唆している。

このように、自閉的障害児者の描画研究には、Nadiaによって議論を呼んだ、絵の形態や描画行動の謎を描画発達理論や自閉症の認知的な障害との関係で解明しようというものと、描かれた内容に注目しその感情的意味や病理的な視点から自閉的障害者の内的世界を理解しようというものがある。ここでは、1事例の絵をその両者の視点から分析して彼らの絵を仮説的に解釈することを試みる。

2 事例 A君(男性)

2-1 生育歴 幼児期に自閉症と診断される(当時の状態は、DSM-IVの自閉性障害の診断基準を満たし、かつ、知的には中度の発達遅滞であった)。3歳から幼稚園で統合保育を経験し、小学校の心障学級から養護学校中・高等部に進学し卒業した。その後、作業所の経験後、現在、就労している。

2-2 方法 以下の資料を年齢、絵の特徴、A君の経験などを関係づけながら整理し解釈を試みた。

資料1 A君は現在までに、おそらく、大小さまざまだが、1万枚というような桁の単位の数の絵を描いたのではないかと推定される。その大部分は廃棄さ

れたが、幼児期から成人に至るまでの数百枚の絵が保存されていて、それらを年齢にそって整理したもの。

資料2 A君が3歳のときに入園した幼稚園で、筆者はその園の保育の相談員としてA君と家族に知りあった。A君が卒園後は卒園児の親の会をとおしてA君の家族とつながりを持ち続け、今日に至っている。その間の母親から筆者への手紙、母親への聴き取り、A君の学校での記録などの資料。

ここでは、まず、幼児期から成人までの絵を、描画の形式と内容から分類し、どのような形式の絵がいつごろ出現したのかを整理する。あわせて、そのときのA君の生活経験の資料から内面的な世界を推定し、絵が表現することを考察する。

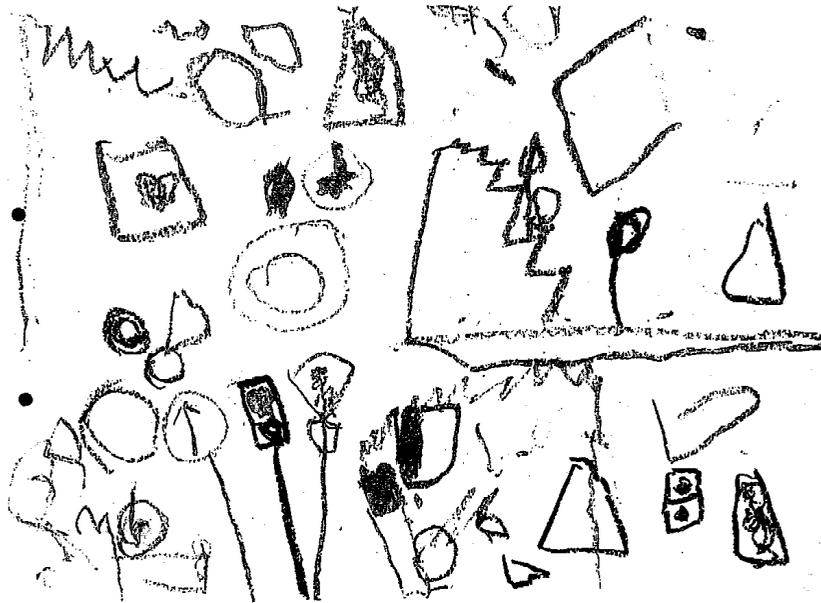
3 結果

3-1 描画行動の全般的特徴 A君は幼児期から中学生まで、自発的に描くことに集中し多くの絵を描いた。しかし描きあがった絵で周囲の人とコミュニケーションすることはほとんどなかった。とくに、はじめは何を描いたかを質問しても応えなかった。それでも中学生の頃には、簡単に応えることもみられるようになった。筆致はしだいに、滑らかで正確になり、熟達した。初期から市販の色鉛筆の程度の色数を使用して彩色したが、色彩よりは、線と形態に関心が強かった。

3-2 描画環境 母親はイラストを描くのが好きだが、家族や身近に美術の特別に恵まれた環境はなかった。学校では小学校1, 2年のときの担任は絵を描くことを肯定的に評価して尊重したが、それ以降は、A君が絵ばかり描いていることは、社会的な適応能力を育てるという視点から好ましくないものと見なされていた。学校や作業所（小学高学年から週末に通った）からのA君の絵を描くことにたいする否定的な評価を、母親は理解しつつも、A君が好んで描きたがることを尊重したいという気持ちの間で葛藤しながらA君に接してきた。

3-3 描画行動の年齢による変化 A君の描画活動は以下の5つの時期に分けて整理することができると考えられる。

I期 4歳頃から6歳頃まで（最初の描画から小学校入学頃まで）



図I 4歳8ヶ月

描き始めの初発年齢は不明。4歳頃は交通標識や文字が書かれた絵本を飽くことなく見ていて、それを取り上げようとするとき激しく抵抗した。図Iは、描き初めて間もない頃のものとして推定される絵であるが、交通標識や幾何学的な形が描かれ、興味が偏っていることを示している。また、すでに階段らしきものが立体的に描かれている。画面全体が交通標識などで埋められているが、それらを画面として一つに統合する構図はまだみられない。描くことより見ることに多くの時間と注意を集中していた。幼稚園での保育場面でも、標識などの絵本を手離そうとしないので、先生がその対応に悩んでいた。

Ⅱ期 6歳頃から10歳頃まで（小学校4年生頃まで）

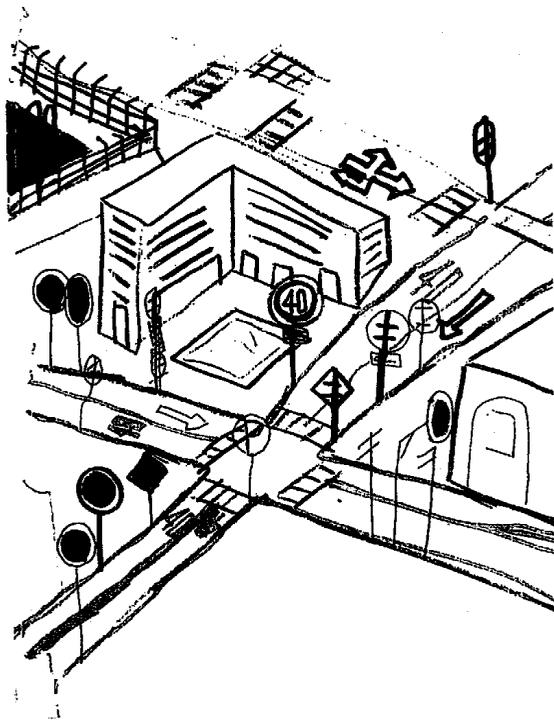
短期間で立体感のある絵を描き、画面全体が統合されるようになる。図Ⅱ-1から図Ⅱ-3までがそのような絵である。学校では担任教諭がA君の表現に心を動かされ、描くことを受容し、「Aの夢の絵集」という名をつけた冊子に絵を保存していた。

また、記号、文字などの模写の興味も高まり、教科書の文字や文章を、ノートに楽しそうに写したり、絵をアレンジしたり、ひらがなを漢字に変えたりしている。

一方で、二年生頃から図Ⅱ-6、Ⅱ-7のような家族と一緒にいる穏やかな光景



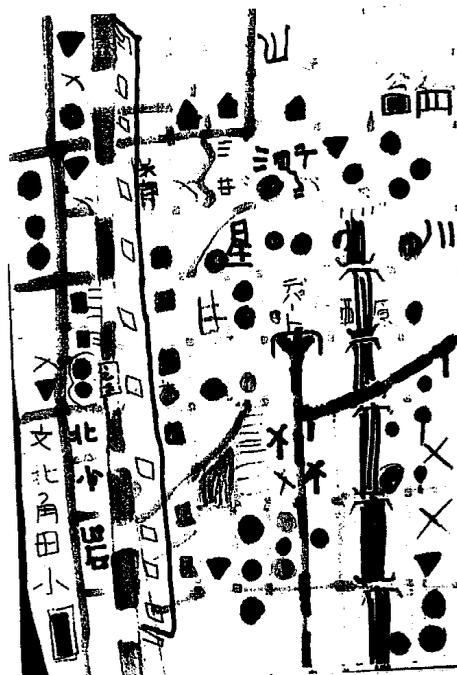
図II-1 6歳9ヶ月 形態型 (立体型)



図II-2 8歳9ヶ月 形態型 (立体型)



図II-3 10歳2ヶ月 形態型 (立体・記号型)



図II-4 8歳9ヶ月 形態型 (記号型)



図Ⅱ-7 9歳6ヶ月 感情型（平穏型）

では、絵を描くことは注意が途切れることとして好ましくないことと評価された。また、A君はおおむね穏やかな子どもだったが、5年生の2学期に、学校で友達から意地悪をされて、それに対して友達を突き飛ばしたり、噛みついたりする攻撃的行動がみられた。

家庭では、週末に知人の作業所で作業訓練を受け、そこでは絵を描くことを禁じるように指導された。それでもA君は家では絵を描き続けたがり、母親はそれを禁止することができなかった。

また、その頃、家でテレビの乱闘シーンや暴行シーンに興味をもち、声を立てて笑っている姿がみられた。それからしばらく後に描かれた絵が図Ⅲ-1からⅢ-4である。描きながら「死ね」とか「バカ」とか「やめて」とか、必ずひとり言をいって、絵にのめりこんでいた。それが絵のふきだしの中の汚く攻撃的なことばに見られる。そのような現実を経験した心理的混乱やストレスを感じさせられる怖くて暗い絵が連日描かれる時期であった。

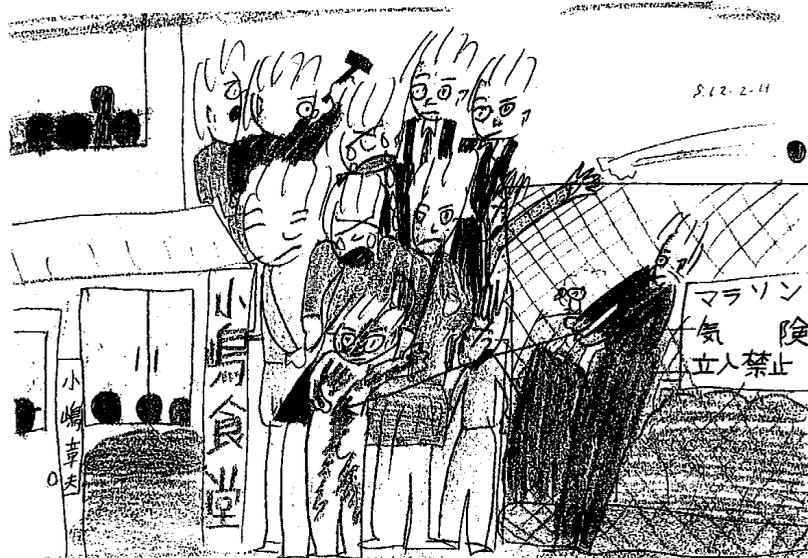
また、それにわずかに先行する時期から、画面を比較的平板に使い、限られた象徴的な記号を多数画面いっぱい埋め込んで楽しみ、密度の高い絵が描かれた（図Ⅲ-5から図Ⅲ-7）。これは、現実経験とは関連の薄い空想的なものが描かれていた。

Ⅳ期 12歳から16歳頃まで（小学校6年から中等部まで）
感情的な表現とみれる絵は描かなくなった。

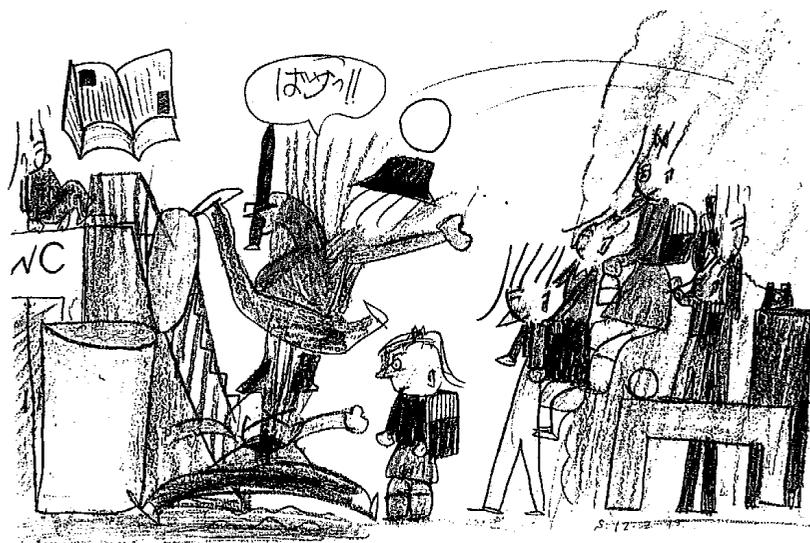
漢字や地図への興味がさらに強くなった。漢字の熟語や当て字を辞典を見な



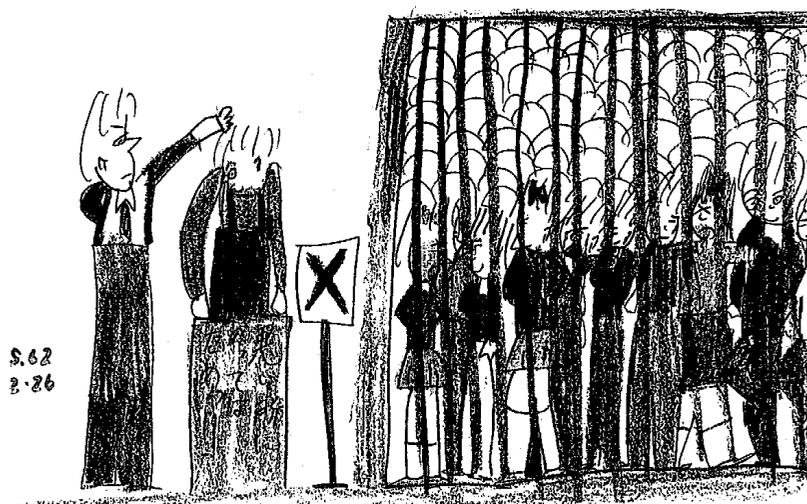
図Ⅲ-1 11歳3ヶ月 感情型（恐怖型）



図Ⅲ-2 11歳3ヶ月 感情型（恐怖型）



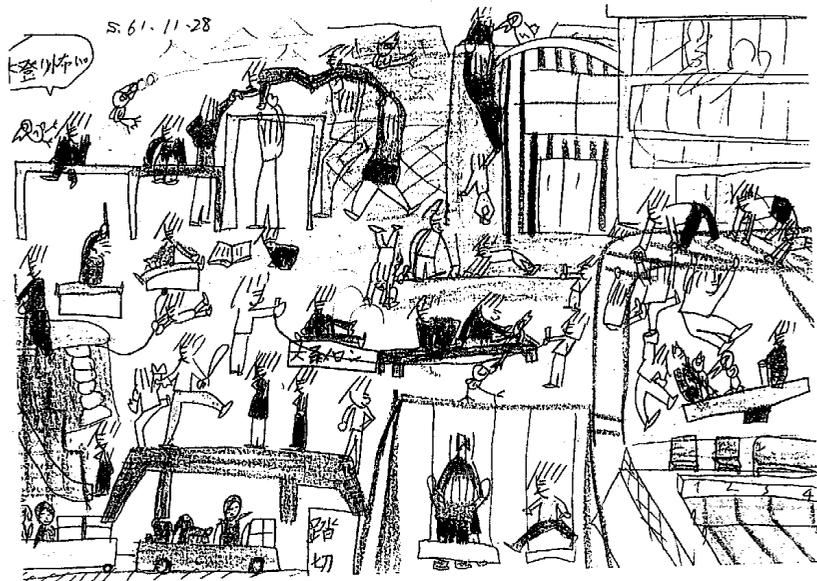
図Ⅲ-3 11歳3ヶ月感情型(恐怖型)



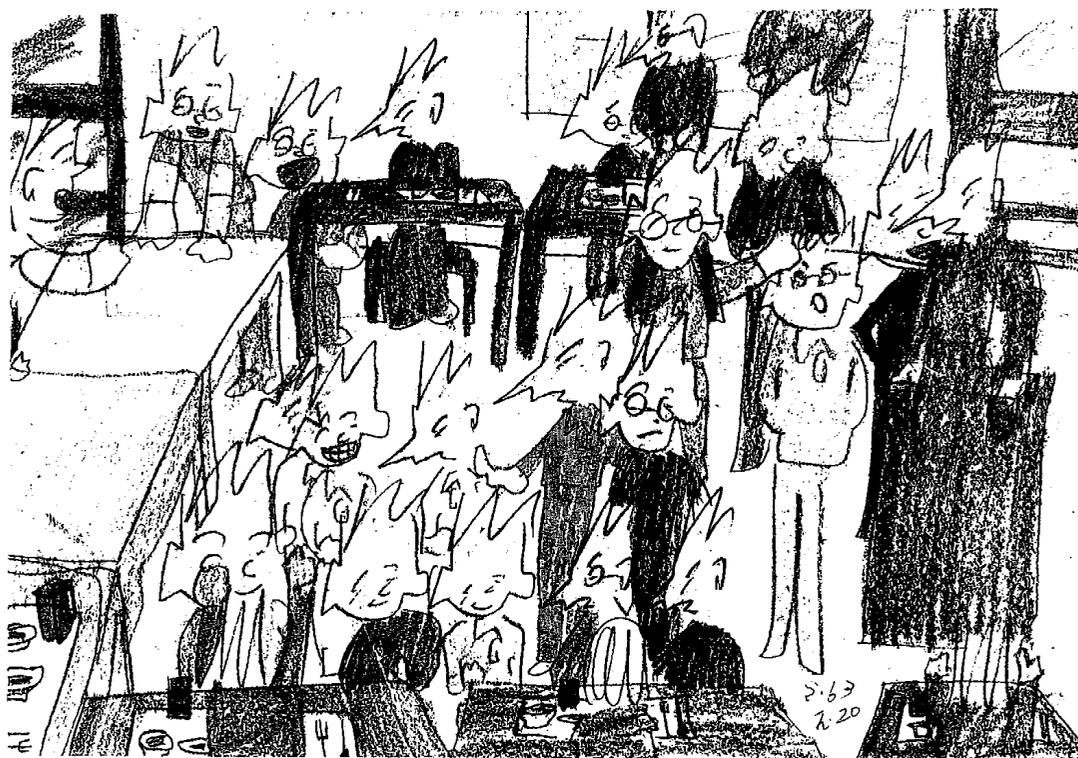
図Ⅲ-4 11歳3ヶ月感情型(恐怖型)



図Ⅲ-5 11歳0ヶ月 埋めつくし型



図Ⅲ-6 11歳0ヶ月 埋めつくし型



図Ⅲ-7 12歳3ヶ月 埋めつくし型

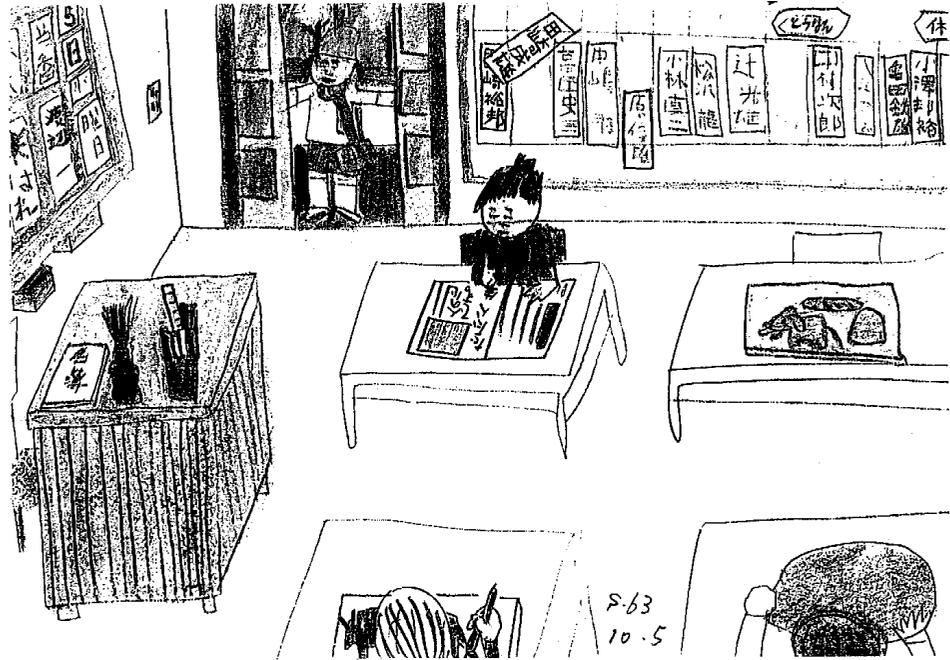
がら正確に記憶し、漢字の画数を質問すると即答する。それを近所の子どもが面白がって質問する姿が見られる。父親とドライブした後、地図を広げて行ったところを手でなぞり「何町から、何町通って、-へ行った」と教えるようになった。住所から、そこを地図の上であてるのに熱中しほとんど間違えなかった。

一方で、立体感のある街の光景などの絵も好んで描き、街の光景描写の克明さが増した(図Ⅳ)。このような複雑な構図の絵を最初から間違えないで描いた。

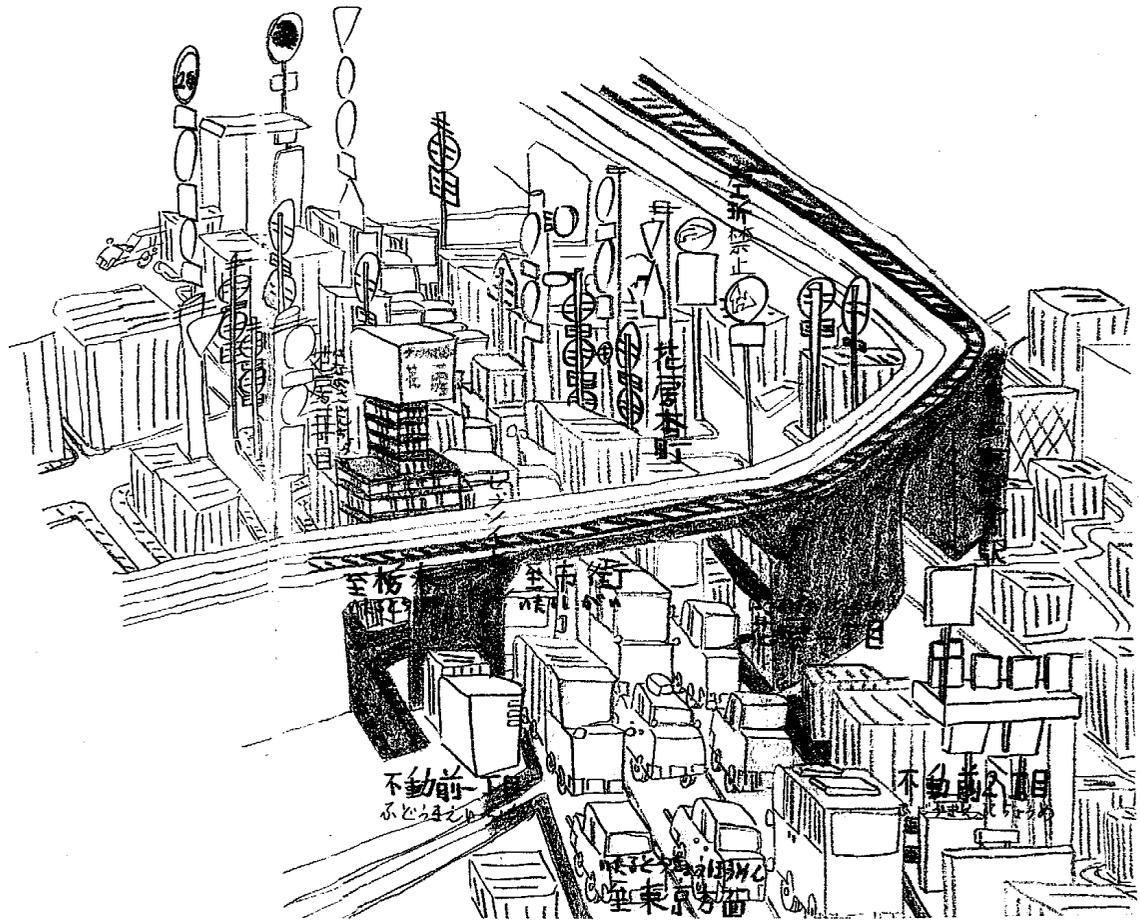
1日1冊の自由画帖を就寝直前までつき動かされるように描いていた。その描いた絵を、接着テープで5センチほどの厚さになるほどに束ねて製本したものを何十冊とためていた。それは手垢でこすれて黒ずんだものになっていて、それをため込むのを母親は気味悪く感じていた。

V期 16歳から23歳まで(高校生から現在まで)

高等部に進学してから自発的に描く絵は少なくなった。ひらがなで描かれた絵本を全部漢字に直して書くとか、意味不明の文章をたくさん書いた。それら



図IV-1 12歳10ヶ月 形態型 (記号・立体型)



図IV-2 13~14歳頃 形態型 (記号・立体型)



図V-1 21歳7ヶ月 現実型

をほとんど暗記して写していた。現在23歳だが、そのような文章も書かなくなった。

促されて描くものは図V-1や図V-2のようなものになった。図V-2は毎週日曜日に母親と図書館に行って本を借りるのだが、それを絵にするよう促されて描いたものである。以前に比べ、筆の運びは遅く、線や形に躍動感がないが、生活経験との対応が正確であり、一枚の絵を仕上げるのに1時間前後という長い時間を要するようになった。

3-4 描画のタイプ

このような時期ごとに見られる描画の変遷をみると図-1のようになる。まず、比較的単純な記号的な標識・文字や幾何学的形態を記憶して、それを模写的に描くことを契機に旺盛な描画行動が始まった。次に、それが、しだいに複雑な記号・文字・地図などになっていった。これを記号型と呼ぶことにする。

記号型とともに、実際の町の光景や室内の光景が瞬間視的・立体的に複雑な構造をもつものになって中等部まで、活発に描かれた。これを立体型と呼ぶことにする。記号型と立体型は文字的あるいは幾何学的な形態の工夫・記憶・再



図V-2 21歳8ヶ月 現実型

現を主たる目的とする描画であると考えられるので、これらを合わせて形態型と呼ぶことにする。

このような描画にやや遅れて、人間や動物が描かれて感情の表現と思われるものを描くようになった。それは、最初は穏やかな感情のものであった（平穏型）が、一時期は恐怖感・攻撃性などの激しい感情を表すものになった。これを、恐怖型と呼ぶことにする。平穏型と恐怖型を合わせて感情型と呼ぶことにする。

そのような激しい感情の描画に先行しつつ同時に、画面を人、鳥などの単純な漫画的・図式的形態で埋め尽くすような描画が一時期出現した。これを、埋めつくし型と呼ぶことにする。

そして、中学生になる頃には、感情的な表現を思わせる絵は描かれなくなり、幾何学的形態の模写的描画と光景の瞬間視的描画を活発に描いた。そして、高校生以降は自発的にはほとんど描かなくなり、求められて描くものは、現実の経験に対応した絵として他者に了解可能な内容をもつが、絵としては平板で平

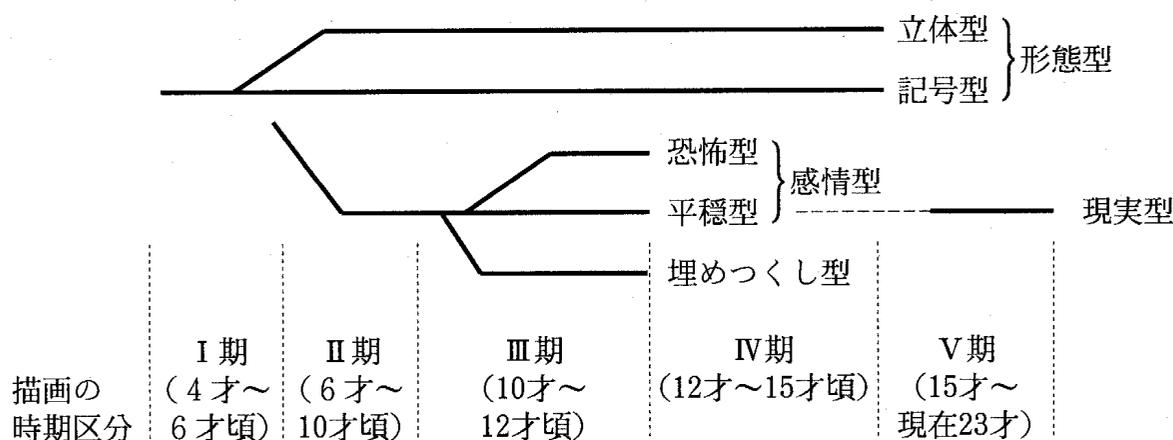


図-1 描画タイプの変遷

凡なものになった。これを、現実型と呼ぶことにする。

このような、A君の描画の変遷をどのように解釈できるだろうか。

3-4-1 形態型 (記号型と立体型)

このタイプの描画は、Nadia 以降しばしば自閉的障害児の異例な描画能力として報告されたものと類似している。A君が、もっとも多量に描き、しかも長期間描き続けたのは、このタイプの描画であった。

典型的には、道路、ビルなどが中心的に大きく立体的に描かれた光景があり、その中に看板、標識、文字などが多数埋め込まれている。光景を描くことが主たる目的のように見えるものや、逆に、標識や文字を描くことが主たる目的のように見えるものもある。いずれにしても、標識や文字の描き方が精細で、それが全体の絵の印象から不調和な印象を与える絵が多い。人物は描かれていても付加的である。筆致は素早いですが、しだいに丁寧で正確になっていった。実際に見た光景や、本・写真等で見た絵・文字などの記憶像を变形・合成して描いている。その変形の程度は小さいと考えられ、母親が、そのもととなった絵本などを見つけられることがある。絵の形、構図はおそらく、絵本、写真などの視覚的なメディアから採り入れて、繰り返し記憶し習作する過程で熟達したと考えられる。

このタイプの描画は、対象との対応関係が全くないわけではないようだが、稀薄である。つまり、何かの表現として記号や光景を描いているというよりも、その形態を紙の上に産出すること自体を目的として描いているように見える。

どこの何の絵であるかという問いにA君は応えなかったし、自分が行ったこともない地名が街の光景のなかに描き入れられていたことから、そう考えられる。通常の子どもの描画発達において、視覚的リアリズムと呼ばれる時期の絵と形態上は類似しているが、その意図も心理的機能も異質な点が多い。

自閉症児・者の数百枚の絵の特徴を分析した、寺山ら（1998）によれば、彼らの絵には限られた対象が繰り返し描かれ、その形態は少しずつ変化し、細部がより正確に描かれるようになり、表現方法の上達が見られる傾向がみられたという。これは、A君も共通している。同じ対象が繰り返し描かれるのは、対象を表現することより、その形態の描き方を練り上げ習熟していくことに関心があるためであると考えられる。

3-4-2 感情型（平穏型と恐怖型）

平穏型の描画が出現した時期は、A君の環境（家庭、学校）がA君にとって穏やかで受容的であった時期であった。恐怖型の描画が出現した時期は、それに先立って学校でも家庭でもA君にとってストレスになることが持続的に見られた時期であった。

感情的な表現として自閉的障害児者の絵を研究した例は、Ishiiら（1996）や木原（1990）に見られるが、いずれも楽しい経験を想起し再現していると考えられるものである。A君の平穏型の描画は、典型的には、登場人物としてのA君、両親、飼猫が公園にいたりドライブしている状況として描かれている。これは楽しかった経験を思い出し懐かしんでいるように見える点では、Ishiiらや木原の紹介する事例に類似している。また、和田野（1997）は1事例の女性の自閉症者の生活を報告し、彼女にとって、描くこと、書くことは、一日の疲れを癒し、ストレス解消の手段でもあり、描くことを自閉症者の豊かな趣味としてとらえる可能性を示唆している。

A君の平穏型の描画の光景の中には、標識や文字などが描き入れられても、その量は少ない。その点では記号型や立体型の描画とは異なる心理的意味をもっていると考えられる。それは、Ishiiや和田野が指摘するような、過去を再現する楽しい活動なのかもしれない。

恐怖型のような描画の報告例はこれまで見当たらない。A君は5年生の3学

期に特に恐怖感を強く感じさせる絵を連日描き続けた。その表現方法は、次のようなものであった。

一つは描かれた行為や状況が残酷で恐怖を感じさせるものである。矢印や刃物によって人を刺し、そこから血が出ている（図Ⅲ-2, 図Ⅲ-3）、子どもが逆さ吊りされたり、逆さに空から落ちてくる、3人の男が1人の男の頭と足をもって引っ張りいたぶっている（図Ⅲ-1）、沢山の子どもたちが檻に閉じ込められている（図Ⅲ-4）、喧嘩や争いをしている、などである。

次に、吹き出しのなかのセリフが攻撃的で怖いものがある。「ばかーっ！！」、「こら、ばか」「ああ---、おしっこ。ばか、どけ---！！」。「うるさい」「嫌いです、悲しいよ、ごめんなさい、うるさい、だめ」、などである。それに類似した表現として、背景に描かれたテレビ画面に、「自殺令」というような恐怖感を感じさせる言葉が描かれるものがある。

さらに、登場人物の表情に悲しみを感じさせる表現が随所に見られた。特に涙を流して泣いている顔が多数描かれた。泣いて悲しい表情は、両目を×にして簡略に表現している。

その他に、いけないことをしている人を指さして叱責して咎めている場面が何度か描かれている。たとえば、小便をしている後ろ姿の男を見ている側の男が責めるように指さしていて、そのとき「外でおしっこしちゃだめ」と独り言を言いながら描いていたという。あるいは、画面全体が黒く塗りつぶされるものも見られた。

このような異様な印象を与える絵を、当時A君は独り言を言いながらのめり込むように描いていた。そばにいた母親は、頭が痛くなるほどだったが、これでストレスを発散しているのだろうかと考えて我慢して見守っていた、という。

このような絵に描かれた情景や出来事が、どこまで、現実と対応しているのか母親にも判別できない。おそらく、現実を経験した怖くて嫌なことに関する感情が、テレビで見た暴力場面などと混然と融合して、区別がなくなって描かれたのではないかと考えられる。

しかし、連日描かれたのが、学校でからかわれたりしてつらい思いをした時期から、2, 3カ月遅れていることは興味深い。過去のつらい感情をともなう

記憶を思い出しながら描くことでそれを消化しているのかもしれない。そうであるならば、描くことができたおかげで、他の適応上好ましくない行動、たとえば、激しいパニックなどに陥らないですんだのかもしれない。そのようなカタルシス効果を描くことがもっていた可能性がある。

3-4-3 埋めつくし型

図-5はこの型の典型的な絵である。これはB5サイズで、鉛筆描きのうえに数色の色鉛筆で彩色されている。このなかに小鳥が記号のように単純化されて34羽ほど描かれている。このような光景は、現実にはありえないことは明らかである。他のタイプの絵に比べて、埋めつくし型は現実感の稀薄さと、空想性が非常に強い点で特徴的である。

ワロンら(1995)は、精神病的障害のある子どもの絵の例をいくつかあげ、その中に画面全体を紋切り型の表現で埋めつくすものをあげている。それは、たとえば、人を小人のように小さく描いて、「赤ちゃんにまた戻りたい」という意味をもち、それを、いくつも連続して描き画面を埋めつくす絵になるものである。A君の埋めつくし型の描画には、小鳥だけでなく小人や子犬も繰り返して描かれている。これが、どういう意味を持つのであろうか。

鳥は8歳頃から10歳頃までの絵では、公園の光景の一部として不自然ではない程度に描かれていた。また、8歳頃の絵には、大きく描かれた鳥とA君と思われる少年が親しそうに共にいる姿が描かれている。それらの絵を見ると、鳥はA君にとって心の中で友達ともいえる親和的な存在であったことが推定される。それが11歳頃に急激に数が増えて描かれるようになった。この時期は、学校で実際につらいことがあった時期に一致している。現実のつらい経験に対処することができず、高度に空想的な心的世界でイメージを展開していたのがこのような絵なのかもしれない。

恐怖型の絵が頻繁に描かれた時期は、埋めつくし型の絵が頻繁に描かれた時期に、やや遅れる。おそらく、現実の困難に対して、まず、埋めつくし型のような親和的なもので満たされた空想の世界への逃避、ないしは、現実からの意識の解離としての絵で対処し、しだいに、困難場面の恐怖感を絵の中に表現できるようになったのではないだろうか。

なお、図Ⅲ-7は埋めつくし型で最後に描かれた1枚である。この絵は、A君の絵の中でも、筆致にもっともよどみがなく、描き込んで熟達しており、構図も完成されている1枚である。この絵はやや人物の顔がキツネ顔で狂気を感じさせるが、この型の絵が、A君の絵の中でも、もっとも完成度が高い印象を与える。

3-4-4 現実型

図V-1は、その前日に山菜採りに行ったときのことを描いたものである。実際の経験が、ほぼ、正確に描かれていて、母親は、その絵の内容を現実経験と照合できる。

描くときは、実際に、たとえば、その時どんな洋服を着ていたか思い出せない、母親に質問して確認して描こうとするようになった。以前のように何かに憑かれたように描く姿は消失し、描くように促すと、時には拒否し時には応じて描くが、描きながら現実世界とのつながりを持っている。描きながら周囲とのコミュニケーションがとれる。その筆致は、以前よりもやや遅くなり、より丁寧になった。

現実型の絵は説明的である。通常の子どもの幼児期の知的リアリズム段階の絵に類似して、却って以前の絵よりも描画能力が低下したように見える。画面のなかで人物が中心に描かれ、人物は横顔なども描かれるが正面が多くなり、顔の表情はこけし顔で単調で平板である。

5 全体的考察

A君の20年に近い年月にわたって描かれた絵を概観してみると、これが同一人物によって描かれたということが信じられないほどで異質なものがある。

これまで、自閉的障害児者の絵は、その異例に早熟な絵や特異な描画行動に注目されてきたが、限られた偏った絵しか描けないと見なされていた。しかし、長い年月にわたって描き続ける場合には多様な描画活動が見られることをこの事例は示している。このような描画活動を、どのように理解できるだろうか。

5-1 生得的傾向

A君の描画能力は形態型の絵を描き続けていくことで上達したと考えられる。

形態型の描画は、これまで自閉的障害児の描画として多数紹介されたものと似ている。

A君の描画全体を概観してみると、感情型と埋めつくし型は、環境に対する反応として描画活動が活性化されたと考えられるのに対して、形態型は、A君の生得的な傾向に多くを根差していたのではないかと考えられる。

今日、彼らの認知能力の欠陥に対する補償として、卓抜した描画能力が発達するというような欠陥仮説は支持されていない。しかし、認知的発達のなんらかな生得的な傾向を想定しないと説明できないというのが一般的な見解である。

Milbrathら(1996)は、このような描画を説明するには、全般的な知的発達が描画発達をも規定すると考えるよりは、領域特種的な知能を前提にして理解すべきであるという。自閉的障害児は、世界を強い視覚的なバイアスをもって見ていて、彼らが描く絵は、通常の子どもが知的リアリズムの後に達成する視覚的リアリズムと異質であるという。世界を visual surface (例えば、自動車を見ても四角と4つの丸と見るのではなく、三角の続きと楕円と見る)として見る能力をもち、これが並外れた視覚記憶と結びついているのではないかと考える。そのようなきわめて、特殊な領域の知能が優れているのだと考える。

そのような visual surface という概念を用いると、A君には以下のような強い活動傾向が3歳代から生じ15歳頃まで持続したといえるのではないかと考えられる。しかも、これは教育の影響などから、かなり独立に生じ、持続した。

活動の亢進性 以下の情報処理活動を、ときには衝動性を伴いながら、集中的・持続的にする傾向がみられた。

- ・探索 好みの visual surface (輪郭・形・色・構図・配置・線質などからなる面)を日常的に探索している。
- ・注視 visual surface に対する異常に強く持続的な注視傾向がある。
- ・記憶とイメージ処理 visual surface のイメージを日常的に想起、加工、保持している。
- ・産出 絵・文字・記号などを短時間に多量に産出し、しばしば紙の枠などの絵や文字をかく場所、向きなどの社会的慣習を無視する(空書の場合もある)。

活動の偏り 通常の同年齢の人の活動傾向と著しい偏りがある。

- ・活動の質 自分の絵に対する他者の反応に無関心で、絵を媒介にして他者とコミュニケーションしない、孤立的な活動である。
- ・活動の対象 絵の対象指示的側面に関心が乏しく、対象の visual surface 自体への関心が強い。visual surface の確認、合成、変形などの作業に没頭する。

Gardner (1991) は、このような生得的知能について、そのコンピューターの装置はくりかえしの描く過程で描く技術を学習するのだろうと解釈している。A君は、くりかえしの練習によって、自由に多くの形態を発展させ生み出していった。そのような、かなり狭い領域に限定された知能の発達がみられる端的な例であろう。

このような描画の活発な活動傾向はコミュニケーションの発達によって抑制されるようである。A君が16歳頃から自発的に描かなくなったのは、絵が現実場面と対応し、絵に描いたことを他者に伝えるようになったり、促されて描くようになるなど、描画活動が他者とのコミュニケーションのなかに位置付いたときであった。Selfe も Nadia が描かなくなった要因としてコミュニケーションの発達をあげている。また、木原の事例では、よい形を表現するものと、他者とのコミュニケーションの媒体として用いるものの二通りの描画活動の楽しみがあったとして、前者の構図は実物の輪郭線をなぞるようにして複雑な遠近画を描くのに対して、後者は遊具や人の動作を単純な平面図形の組み合わせで表現している。そして、前者から後者の描画に移行するにしたがって、描画活動は不活発になっている。

5-2 環境と教育

現在のA君の絵は、自発的に描いた時期の絵に比べてかえって稚拙になり、絵としての魅力という点からは平凡な絵になった。しかし、年長になり大人になっても魅力的な絵を描き続けている自閉症の人たちがいる。その中には、展覧会で受賞したり、個展が開かれたり、画集が出版されている多くの人たちがいる。絵を描くことが社会的に認められると、その人の自立の基盤がより広く豊かなものになる。

そのなかでも、Stephen Whiltshire^註は画家として成功し、もっとも広く知られている。その絵は、遠近的に巧みで緻密であること、たくさんの絵を描き続けたことなどの点で、NadiaやA君に似ているが、NadiaやA君に比べて、より美術的な環境に恵まれて育った。そのことが、Stephen Whiltshireの描画活動を持続的なものにし、より豊かなものにしていった一因ではないかと考えられる。彼は、Nadiaなどとは違って、言語能力などの全般的な発達を高めながらも描画意欲を失わなかった。

寺山らは、自閉的障害児・者の絵を数百枚収集して、その描画の特徴を分析している。その絵の中には、かなり年長になって美術の指導を受けて描くようになった人たちの絵もふくまれている。その分析によれば、絵を描く自閉的障害児・者の背景には描画指導があり、それは、一つには、絵を描くことを積極的に認める家庭・学校や指導者に恵まれるというような環境であり、もう一つには、描くきっかけ、鑑賞・技法・画材などの指導の充実である。

A君の現在の生活は、平日は勤務から定時に帰宅すると自分の部屋でラジオを聴きながら好みの雑誌を見て暮らしていて、休日には家族が図書館に一緒に行き本を借りてくる生活の繰り返しである。家族としては、A君の交友関係や活動範囲がもっと広がればと願っている。A君が、絵を描くことを豊かな余暇として楽しめて、それが評価されるようになれば、彼の生活が豊かで開かれたものになるだろうと思う。そのためには、現在の安心できる生活を大切にしながら、美術の専門的な指導や、絵を描くことを認め励ます幅広い人の存在などが必要なだろう。今後、そのような環境整備を行って、A君の描画と生活がどのように変化するか援助・見守りたいと考えている。

また、A君のこれまでをふりかえると、小学校の高学年の時代に、絵を描くことを学校や作業所の指導者から否定的に受け止められ、時には禁止されたことが気にかかる。木原の事例でも病院からの指導によって絵を描くことが禁止された時期があったと報告されている。自閉的障害児が絵を描きたがることを、困った固執行動とみて、指導上好ましくないこととみるのは、本邦の自閉的障害児の療育・教育場面では珍しいことではないが、その才能を開発するという視点からの教育も考えられるべきであることを、A君の事例は示唆している。

さて、A君の恐怖型や埋めつくし型の絵は、単に巧みであるというだけでなく、見るものに恐怖感や奇異な違和感などを感じさせる。このような絵は、発達障害としての自閉的障害に起因して生じたというよりは、それを基盤にしつつ環境との関係のなかで生まれた心理的な問題の影響によって生みだされたと考えられる。このような絵は精神障害的な兆候のようにも見える。もしそうだとすると、それをどのように受けとめ指導すればよいのだろうか。

障害児の発達においても、小学校の中学年から高学年は、思春期の入口として自己形成において複雑な困難をかかえる時期である。それまでの認知的な障害や遅滞が人格形成の歪みとなって現れてくるといわれる。A君の恐怖型・埋めつくし型の絵の出現は、そういう障害児が直面する問題のあらわれの一例なのかもしれない。

そうだとすれば、このような絵による表現を手がかりの一つとして、彼らに対する教育的な指導・援助を考えることができると考えられる。

また、この時期の恐怖型や埋めつくし型の絵を描いていたA君は、人生でもっとも創造的で芸術的であったという見方もできるのではないだろうか。これらの絵を見ると、A君が高度に熟達した描画能力を自在に駆使して、現実から遠く離れた空想の世界を自由に画面の中で創造していたように見える。このような、やや病的ともみえる創造性をいかに受けとめ生かすことができるのだろうか。そのような課題もまた、A君の事例は投げかけているといえる。

謝辞

貴重な絵の掲載を快くおゆるしいだだいた、A君とその家族のみなさまに感謝いたします。

注 Stephen Whiltshire の画集は、本邦では、「ドローイングス」 スティーブン・ウィルシャー画集 I, II すえもりボックス で翻訳・出版されている。

引用文献

Arnheim, R. 1980 The puzzle of Nadia's drawings. Arts-in-Psychotherapy; Vol 7 (2) 79-85

- Charman, T. & Baron-Cohen, S. 1994 Drawing development in autism: The intellectual to visual realism shift. *British Journal of Developmental Psychology*. Vol 12 (2) 235-239
- Gardner, H. 1991 ハワード・ガードナー, 中瀬律久・森島慧訳『芸術, 精神そして頭脳—創造性はどこから生まれるのか—』黎明書房
- Golomb, C. & Schmeling, J. 1996 Drawing development in autistic and mentally retarded children. *Visual Arts Research* Vol 22(2) 5-18
- グラディン, T. 1994『我, 自閉症に生まれて』学習研究社
- 浜谷直人・木原久美子 1990 自閉症児の特異な描画技法の発達過程 教育心理学研究 38巻1号 83-88
- Ishii, -Takashi; Ishii, -Akira; Ishii, -Takaaki; Sugiyama, -Toshiro, 1996 Drawings by an autistic adult chronicling a day in his childhood. *Visual Arts Research* Vol 22 (2) 47-55
- 毛塚恵美子 1991 自閉性発達障害児の描画能力 群馬県立女子大学紀要 第11号 89-100
- 木原久美子 1990 表現過程がひらかれていく過程を見る—自閉症児の描画へのこだわりと遊び—『僕たちだって遊びたい』心理科学研究会編 ささら書房
- Milbrath, C. and Siegel, B. 1996 Perspective taking in the drawings of a talented autistic child. *Visual Arts Research* Vol 22 (2) 56-75
- 森口奈緒美 1996 変光星 ある自閉症者の少女期の回想 飛鳥新社
- 中野知子・勝野薫・栗田広 1992 発達障害児における人物描画能力と自閉的傾向の程度との関係 乳幼児医学・心理学研究 1 (1) 39-42
- サックス, O. 1992『妻を帽子とまちがえた男』高見幸郎・金沢泰子訳 晶文社
- サックス, O. 1997『火星の人類学者 脳神経科医と7人の奇妙な患者』吉田利子訳 神童たち 早川書房
- Selfe, L. (1977). *Nadia: A case of extraordinary drawing ability in an autistic child*. London: Academic Press.
- Selfe, L. (1983). *Normal and anomalous representational drawing ability in children*. London: Academic Press.
- Selfe, L. (1995) *Nadia reconsidered*. In Golomb, C. (Ed) *The development of artistically gifted children: Selected case studies*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc; Hillsdale, NJ, US
- 田村浩子 1987 自閉性障害児の描画表現—人物描画の発達的変容に焦点をあてて—障害者問題研究 50巻 34-46
- 杉山登志郎 1997 千数百枚の連続画に描かれた幼稚園のある一日 ころの科学 73号 94-100

寺山千代子・東條吉邦 1998 自閉症児・者の描画表現の特徴 国立特殊教育総合研究所研究紀要 第25巻 75-82

トレッファート, D. A. 1990 高橋健次訳 なぜかれらは天才的能力を示すのか サヴァン症候群の驚異

和田野康子 1997 豊かな趣味を楽しむ自閉症のY子さん 季刊発達 18巻70号 96-103ミネルヴァ書房

ワロン, P. カンビエ, A. エンゲラール, D. 1995 子どもの絵の心理学 加藤義信・日下正一訳 名古屋大学出版会

Williams, D. 1992 Nobody Nowhere. Times Books/Random House NY (ドナ・ウィリアムス 1993 河野万里子訳 自閉症だったわたしへ 新潮社)